

平成6年度

地域畜産状況レポートNo.3

社団法人 熊本県畜産会

# 肥育専門ヘルパー制度で ゆとりある肥育経営を実現

菊池郡旭志村伊萩 大塚祐次氏

くぬぎやならなど木漏れ陽のなかであう野鳥のさえずりや小動物。自然の光・色・音・香りは、全身にやすらぎと潤いをあたえてくれる。そこに四季の里、旭志村がある。

また、旭志村が誇る鞍岳山（標高1,119m）山麓の豊かな自然環境は、全国にも知られるすごい畜産の村でもある。

1980年12月、国道325号線バイパスの開通により、進出企業も24社を数え、熊本テクノポリス圏域のなかで、旭志村は「バイオの森」として位置づけられている。その中心に**大塚牧場**はある。

## あか牛は高値で販売

祐次氏（42才）は、高校卒業後1年間両親の手伝いをしていましたが翌46年、派米農業研習生として2年間<sup>アメリカ</sup>米国に渡る。

当時は、米170aと麦、それにあか牛の繁殖牛親子18頭がいた。昭和50年、後継者育成資金250万円を借入し、40頭規模の畜舎を建設。哺育を4年間。その後、子牛価格の値下がりもあり、肥育に切り替える。そのため、昭和56年80頭規模の畜舎600万円を建設。その後、増頭のたびに昭和60年、80頭規模1,200万円。63年300万円。平成2年700万円とつぎつぎに肥育舎を建設。一部乳肉複合経営の60%補助事業もあつたが、現在では、補助残も含め建設資金はすべてくりあげ償還をされている。

あか牛は、一貫肥育し、平成3年の暴落するまえに繁殖親牛とも飼い直し肥育とし平均50万円の高値で販売できたとか。

結婚は昭和55年。

## 素牛は地元から

肥育当初は、生後6ヵ月以上の素牛を導入していたが、育成状態が不揃いのため、なかには下痢で一度に数頭も死亡することもあったので、最近では生後10日前後で導入している。

価格は、ホルス60千円、F<sub>1</sub>100千円。ホルスのほうが飼いやすいが、当地はF<sub>1</sub>の生産も多く、約60%はF<sub>1</sub>である。子牛の相場が高くなればF<sub>1</sub>が多くなり、安くなればホルスが多くなる。素牛の購入は殆ど地元からである。

地元の素牛は、以前、初乳の哺乳検査を実施していたこともあり、健康状態もよく哺乳段階で死亡することはほとんどない。

現在の頭数は270頭（ホルス120頭・F<sub>1</sub>150頭）。



▲ひなたぼっこをする若令牛



▲カーウハッチ

## 哺育中に去勢

哺育は毎月15~16頭、多いときで20頭。哺育期間は60日をめやすにしている。すべてカーウハッチを利用。カーウハッチは一頭一頭観察できるので、哺乳状態、下痢等の病気の早期発見、早期治療ができる。旭志では独自の予防薬（四種混合）を投与しているので、肺炎はもとより、下痢も少ない。60日過ぎれば、8~10頭の群飼となるが、このときが、特に気をつけるときでもある。発育が充分でない子牛は、もつと哺乳を続ける。カーウハッチの入替のとき、特別な消毒はしないが、敷料は総替えをする。

去勢は体重60~80kgの輪ゴム去勢である。以前は、肥育部会の同志が皆集まって、250kgていどの子牛を去勢していたが、ストレスが大きかった。哺乳中の子牛は、自分でできるし、簡単である。ただし、肉質についてはいまのところわからない。

牛舎消毒は肥育団地で一齐に実施しているので、病気がでないかぎり個人ではしない。



## 粗飼料は自分でつくる。

昔は米・麦等を作り、とても忙しかったが昭和61年から肥育専業である。いままでの田・畑を荒らすわけにもいかず、現在は1haほどトウモロコシ、ソルゴの混播をしている。ソルゴは2回刈となるが、すべてサイレージ。サイレージは少しずつではあるが、肥育前期を年間とおして給与している。嗜好性もよいので今後も続けていきたいとのこと。

また、飼料畑は、堆肥の処理場ともなる。使いきれないぶんは、畑に野積みしておけば、ほしい人が買いにくる。どうしても余るぶんは、堆肥センターに運んでいる。これは全体の10~20%。敷料は、平成2年、インバーターを取付けてから、ながもちするようになった。

敷料の交換は夏2ヵ月、冬3週間。



◀ パソコンシステムと奥様

## 肥育専門ヘルパーはおおだすかり

年中、牛の管理に追われているので、ゆとりがほしい。

旭志では、平成3年から**肥育専門のヘルパー制度**が発足した。当時は月に2回の休み。平成5年からヘルパーの増員もあり、毎週1回の休みがとれる。休みだからといって特別にすることもなく、終日家族とともにゆつたりとしている。ただ、哺育牛だけは担当が変わると病気がちなので、これだけはかちこ夫人の手は離せない。

料金は、200頭まで10,000円。それをオーバーするときには、1頭50円が加算される。ヘルパーを頼めば子牛と接する時間も多くなり、管理もゆきとどく。

子供（長男11才、次男9才）たちも、毎日手伝いにくるが、将来は別なところに移転し、F1主体の500頭規模が夢である。